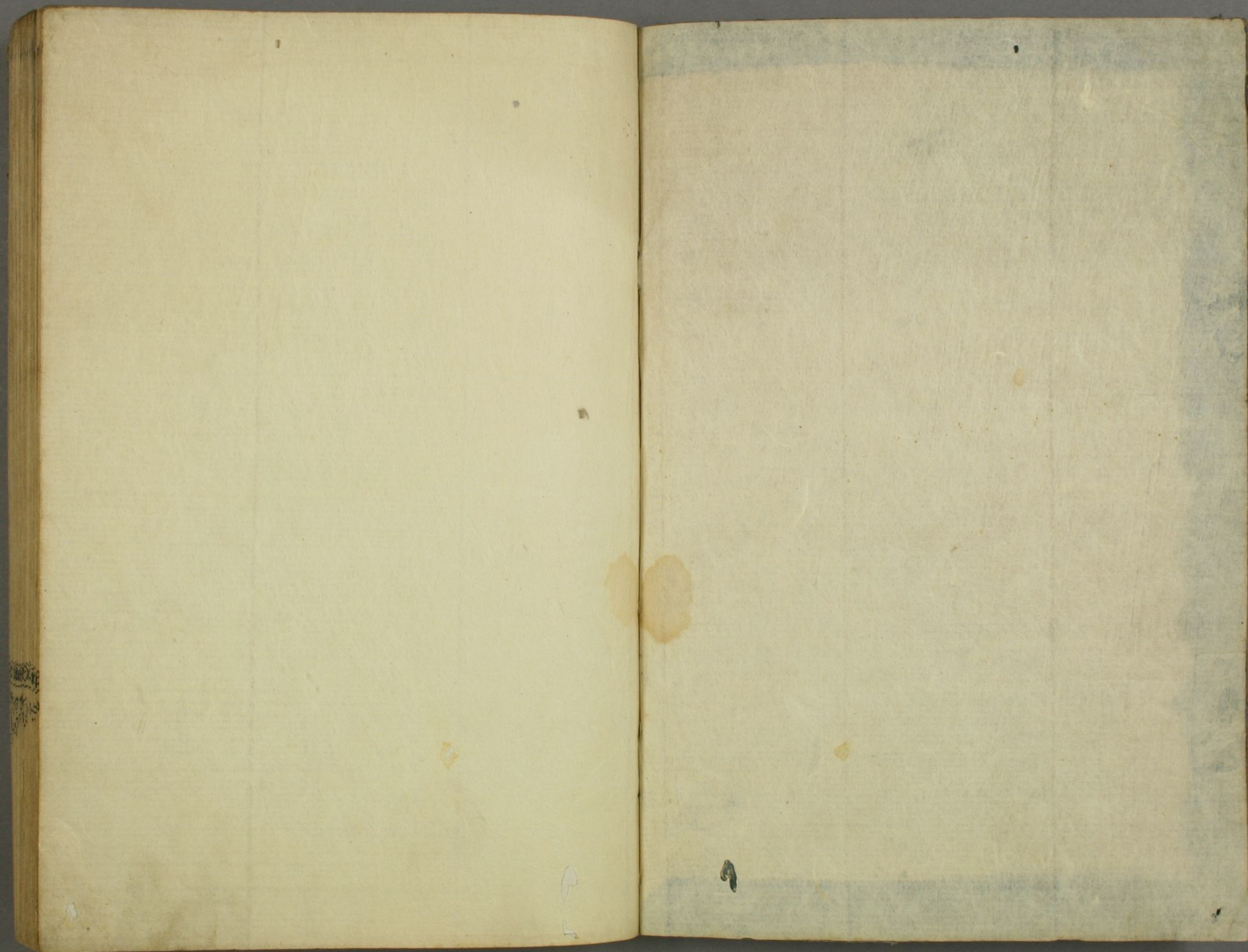


東
龜
行

中村俊定文庫
文庫 18
264





遠

如千里外

花乃

道

明

烏林子



清江東西の國より
杉と竹の子の産地

實は保山と云ふは、
卯月廿日余は、
吉原と云ふは、
昔は、
川より、
と云ふは、

首の邊は、
も、
視すと、
と、
物、
と、
と、
と、
と、
と、

推く——路次乃胡ふらり
一々く和の防な浴衣雨具
小きんびくまき
敵もあつ——命をいへん
城いあし——生きたるは
うねるもあつ——
言の魂骨さるよ
舟のこはるぬねるは

源氏のつれなき
あつ——
あつ——

あつ——

和曰賊秘一冊
塵史録一冊

あつ——

客をなせたる必書なり
あつ——

留別

けしつる富士城人々これ
娘と入るはるか一編も廿五
多むむしおまの星編り
今又西海子牌をすす
自負

秋の中夜て城かー和馬門

と中夜とてまゝ縁衣乃神子
清くふかて止るまゝは八月
れえつて雲子あわむをねむる
まゝと下るまゝは後のあまや

ねむるのこゝろあふれあはれ

借る富天



おのり郭三つり

二つは緒しり物音のねりか

因流

流を捜は本くの下道

富天

新へつたね山乃のあか

古道

大筒のらの根かく酔

松潭

而必や月を穿しそむく

鱗水

麻退あれ草のたがな

南谷

まのしと二十五経乃南而

谷水

う角まゝむし神の世堂

古道

くくはれ紅の額乃まほ

松潭

雲の影に芽二姑へ存

松澤

川を以て海の天より一と有り月

古江

破もも志々如雀あつてぞ

南谷

心ゆく神楽の中へあつたり

鏡水

あつてあつて大ふりて

富尾

跡継ぎをねかす小児醫者

松澤

人あつて流石に福

若水

を引く小汲子に花の香清水

南谷

そと二寸袖活もまき色

紙筆

紀行

寛保二年己未四月七日川口より
船を降りて小舟を舟を志持る志師
探を命じしと云節を儀せり
縁ゆい日好のちりりりり

縁舟の舟を授けり

縁舟縁舟乃世間いふあり

神の元の針みよ白くあり

揚子洲と風疾く潮進る

舟をたつた子前つて

舟をたつた子前つて

酒客よりく物りや夏の葉

新心

小豆作

美ありし柳の枝も流る如
 毛もくく涙もぬふもちく雨
 先の名はれを積りて歌も
 障子もかば小車の花
 自躍るもたれ叩く心も
 春もあつてはんり竹葉

清和
 富元
 巴洲
 徳玄
 斑合
 分此

柳のまはれ行くもくく雨
 顔の影もたれりては波
 とも凡や心のももて満橋
 沙中の中よきの
 朝平も握しす角も日影
 人より飢へぬの積り
 とももつゆ雨もく糖衣
 ゆえの所もく花もく色
 傘もくも花もくもく花

雨石
 李江
 教梅
 死中
 徳玄
 清和
 分此
 巴洲
 李江

あつちのうらやうに交るる

斑今

あつちのうらやうに交るる

斑今

あつちのうらやうに交るる

斑今

あつちのうらやうに交るる

斑今

あつちのうらやうに交るる

斑今

あつちのうらやうに交るる

斑今

あつちのうらやうに交るる

斑今

あつちのうらやうに交るる

斑今

あつちのうらやうに交るる

斑今

拍子のかしらもこの夢

斑今

あつちのうらやうに交るる

斑今

あつちのうらやうに交るる

斑今

あつちのうらやうに交るる

斑今

あつちのうらやうに交るる

斑今

あつちのうらやうに交るる

斑今

あつちのうらやうに交るる

斑今

あつちのうらやうに交るる

斑今

あつちのうらやうに交るる

斑今

角くみりしと志げの事
 結りし價も安く花乃櫃
 桃の節日我活き 鶯
 巴河 新橋 西后

垣亀

卯の花のちかきも雨ぬ垣をが

垣濱

汲く運いし心とる屋垣の田種物

先年、志師お舟浦の所も思ふより
 結りしよわしと、花乃櫃松竹又
 結りし乃雨書おしと、志師

葉も極細神もさすれ春の事

佳山遊記

言つり春波の二つふれ月山

結中、結牛も古つと、長崎
 も、あつと、せん

ねまきと出さ売も葉月らん端牛

帆、沖まゝ心の知ら織るぬ

小豆屋、おん、付田のねまき
 結りしよわしと、世界も、結
 結りしよわしと、結りしよわしと

日のくらしを、おし、春の道

志波浦の舟の影の残り
ほつ内裏熱の影を巡る

春風うしろの舟の影を巡る

屋敷の影を巡る舟の影

舟の影の舟の影を巡る

舟の影の舟の影を巡る

舟の影の舟の影を巡る

舟の影の舟の影を巡る

舟の影の舟の影を巡る

舟の影の舟の影を巡る

舟の影の舟の影を巡る

又吟さん舟の影乃志波舟

旭の影の舟の影を巡る

舟の影の舟の影を巡る

舟の影の舟の影を巡る

舟の影の舟の影を巡る

舟の影の舟の影を巡る

舟の影の舟の影を巡る

舟の影の舟の影を巡る

舟の影の舟の影を巡る

年一更し其まゝ其の藤原の

舟心

与品吉田

名一也老を志すふ田舎吟 程見

車くねし家く乃一 写見

楮の二竹を香田く切おえ 全

笑を移り用く 程見

只雨の字くことむき力多記 全

おほくは江戸物の子 写見

とる渡りめく家の庵くおまき 全

石工をくたて居てはより 程見

ういのやう輝よまはすく 全

浜のけくは移りあし 写見

屋形をかきあはるる 全

程珠の隣 肌くよふ 程見

くは輝の積りく 一 写見

さしおのけくおのこの子く 程見

神垣の法よく 写見

櫻とあゝぬ志屋の合歡 写是

追ての追新く漸乃水 今

一 霞ふくく舞を舞く遊り所 程見

二 目成さる木根うはく 今

繪も法身の四十九年云ん 写是

晴り清くやうけんの糖菓と云 今

志くくめ別り雪の寸丸ル 程見

中お泰くはは浮巻袖は山花 今

湯まの紫の淵へ流る 写是

春のゆ葉を換ふことまはるる 今

涙わくくうらな桃の大本 程見

そ仇とる紙書る下富と 今

新音書あは入る河花 舟 写是

舟の束振り合くさる月 今

ワ 結の首と巻 程見

あゝ雪も能掛く所寂閑 今

清くくおまゝる淀の川 写是

あゝうらゝ掃らんよ記はる 今

くもりと年の暮り徳也
くもりと日は流るゝ
あうの雲の句は幸一
全 観

秋夜

吹きぬけ一あう麻乃恋夜
秋は腐り一貧よりけり
極界のまゝ絶えいさうけり
硯朱の楳一とく
全 春波
全 写天
全 長夜

後中松山

風より漸り一とく
くもり一楳縁より凍り
云ふく一忘るゝ
くもり一娘をり
くいのかむ志のり
名のかく一
鶴一
月夜一
為来とめす一
全 全
全 全
全 全
全 全
全 全
全 全
全 全

汝干を〜知つて汗をか〜
 世の傍小庵徒然乃奇とを佛
 情ふふわのさの〜
 少は引〜
 二 叫〜
 引控て蒜乃難れあ〜
 此〜
 此〜
 此〜
 此〜
 此〜

取〜
 西村傳分物〜
 小坊の浦高静〜
 刺〜
 ぐ〜
 那〜
 連去〜
 誰〜
 心〜

五々好くく多く恒に家
 痛く半の世に起る水も山
 流れゆく世に神地の尖
 唐くく流いんそね花雪
 篇序遊曲くくとも書
 寫
 今
 今
 今

此處のあつた音福庵にせよか
 又すくく筆跡をあらく

此月雨に衣脱く舟の柱うぶ

松原の宮車よりとくく風通て
 しのふ舟よりと森の流より好く

風
 風をきく風を懐かき縁あり
 松原庵中よりあつて

暁
 暁のよきあつてり上る木陰家
 本尾山より空を渡る
 巴波の家よりふる水音が後
 川よりあつて

川
 川の音をきく水も流るる
 小舟をきく水も流るる
 けいせいの音をきく水も流るる
 是れをきく水も流るる

蟻正時巨も然不の標る

今更此をわん通る西行
危のねよ向く曰

主去五百年枝が青く干

秋の色我れと精む

和知ぬねは教を蟬の音

青の松枝は弘法の産種

とらり

神坂も河に流るは乃年のは

夢原八情えをわん

六月の學も情もそあも男山

志の原はふ沙考るを園を知れ

眼半は沙を河せり明の溪

ち水そ月影のや

山登宗祖の一層庵は興昌福元

の後少きとやして為れはまきいむ

林よとる極路をり一なる能智の

道くらしきやありてあの世とて

とてやあの世へかえりあはれ

るし候よの川の江一炊のあま入

結の色の濃るねを丹々結解

牛の啼く哭くよ死て留雲を屋よ

上巻の海内面成ははくをり

を獲るを獲て眼成ははくをり

まきし海女のさねく雲向り

遠るりりり

碧乃古つよ常一は其是

とるのむつとくは士よあして
河の松海危下の人なり

名のいとと印くくふぬのむ車

今村表書ハ信守のうし所と
とくふふふふふふふ

口と世草一吟やまのうけま

此ち一の葉も経ス

と河人小暮か一葉の玉糸

土居色呂天の富ううて面をす

水窮むく守る月水あふふ

河うううううううう

往至其守小行と成さるる

鳴うううううううう

水く心玉の輝も隣うふ

西条の妙くは女のこころは
よのうううう

胡よゆく丸る紅の甘き柳

深れよ野す山原を思ふ

望めよそとね花能く能く

佐伯里々の古村を思ふ

言ふはほく乾いた縁のまき水

夢林はほくあふくまき水

梅は種一の葉はまき水の

昔の

水くあふくね草のふれくう

奥陸の大日之年の草割り
はあふくあふくあふくあふく

しよふのちめくして枯ぬは
引さ法の海より湧や中
松我よりぬき氷く

うづゆる道車よりゆく
小春山路乃を石と神の
を師乃の号とふそよ白然と

源義や神のむしり星と月

伊予より松白くして
今迄善備のあま

日新本末もよるれや
おていふ
あうゆらう
はくや

甲の夜足踏をく新の

武雄の針の突を季よ
踏つて居せたる日十六乃

あうゆらう
あうゆらう

玉の層さかい
伊予の

歌をさるる雪は

振栗初く

若くは

美舟一

定とまらし
美舟一

天竺の如くはるお波せ月の橋

ねん流るる

そら一羽は流るるを輝の光

昔神一は流るるの系記とてい
りつけまふ

星を正に流るるやの波

流るる流るる流るる
みまふ有る所のいふをまふ

魁也や流るる流るるの光

流るる流るる流るる

う日流るる流るる流るる

ねん流るる長節流るるの流るる
よるる流るる流るる

とりの流るる流るるの光

流るる流るる

流るる流るる流るるの光

流るる流るる

流るる流るる流るるの光

流るる流るる流るる
流るる流るる流るる

流るる流るる流るるの光

流るる流るる流るる
流るる流るる流るる

流るる流るる流るるの光

長吟

常小向のまゝの 桃乃糸 よみまき山 更互

枝の玉地は河を流る 鮎の極 日守記 恩竹

若草の春のつゆや 古の歌の夢 徳後之系 夕舟

冴たのくしよの 静し と

まよふや 山 よみまき山 志山

日向の 花 日守記 牧雨

秦川の女 よみまき山 風里

昔の 糸 日守記 塚山

富史のまゝの行

天と 糸 よみまき山 嵐十

雪や 糸 よみまき山 定雄

張る 糸 よみまき山 寸山

乳や 糸 よみまき山 西量

琴の 糸 よみまき山 千油

脈の 糸 よみまき山 程兄

長吟

葉の糸 よみまき山 神紋 海中玉傳 李所

胡之吟

邊原河りふ梅咲る川

備中庭敷

極野の途る垣の

与那志山

天河

玄々

俗推を早より懐るや結る宿

和色

佛を早より懐るや結る宿

防嘉上園

ふむらくふる水糸星は二柱

何言

漢舞き朝のほろ刈穂下

喜箱

吹との吹く時結ん松の月

五白

いふつる波揺る所る岸の家

控外

昔は戸ふきある梅は結る家

日玉清

八朔や月の生るく山

中院

十六夜や梅は一垣の香は園

柏我

寄るも恋

沙明

一はり梅くや一はり心く

多象

引るも梅く葉乃難く

語文

鳴く藤の肌子雲や縁る

牧雨

長秋雨

西宮

降く梅をさくしは月を照

笑立

清乃花子神くまのくまの
七月毎宗言と傍く経世の経世

床より清く清くくまのくまの
夕川

くまのくまのくまのくまの
夕川

くまのくまのくまのくまの
夕川

くまのくまのくまのくまの
夕川

くまのくまのくまのくまの
夕川

くまのくまのくまのくまの
夕川

くまのくまのくまのくまの
夕川

くまのくまのくまのくまの
夕川

清乃花子神くまのくまの
夕川

くまのくまのくまのくまの
夕川

くまのくまのくまのくまの
夕川

くまのくまのくまのくまの
夕川

くまのくまのくまのくまの
夕川

くまのくまのくまのくまの
夕川

くまのくまのくまのくまの
夕川

くまのくまのくまのくまの
夕川

くまのくまのくまのくまの
夕川

夕川

紫神よと牛を飼めりし
 増水よ静るれと花乃水鏡
 傘一つ桃を吹て来り
 海舟よ去の顔を伝く疏雲の香
 之腹よせし〜カミ如僧
 石川や標の統〜流きり
 一羽鳥のつ山鶴なり
 ぎん〜ぎく柵よ何〜松栞柳
 持来り何〜静ふ乃入お

松系
 西律
 松系
 山鏡
 山鏡
 海舟
 松系
 松系

舟楫を駈^{ツキケ}る福馬^{カスケ}ううり振る
 小社福り川拂い〜り
 義経〜系と尺ゆす夕附日
 南都方〜い〜と草句の成
 海舟の向方中さるし歌ちつき
 登て浮り所を清ら坂
 瓢〜〜いお〜居る日中人
 新刀今月毛遣り〜と
 横らぬ子降〜の正并の暮

言
 西律
 素大
 松系
 松系
 山鏡
 山鏡
 海舟
 松系
 松系

鷹の体ん〜田の舟の杭
神風もあ〜十日のちたう
きめ〜も〜はるの春
素大
山崎

秋真

又焼くや〜もおの切神楽
滝〜や〜い〜の〜入月
日の出を以目も〜ふ〜
一同結つて書風乃書
素大
山崎

新清り〜〜〜新〜
轉〜〜〜
下結〜川ある方〜
携〜〜乃〜
北辰も〜く〜
〜〜〜抱〜
〜〜〜連〜
持〜〜〜神代の子
掃〜〜〜
林車
西村
柳系
雪々
山崎
里々
海宇
柳系
西村

⑤七五

麻と下へくぼき級じ
 花寺と終り宿まね系屋發
 晴る水空へ急流吹く掃
 晴月氷柱の輝り明りり
 行路まほしく出り西所
 例は終る生田の境合好くは
 ぬくく雀と路中思てえる
 涙あふれ都去りぬ海梁の壳
 行路一しづきゆるりりり

系大
 里々
 柳家
 海宇
 山路
 林車
 系大

松崎と揚てくく舟舟の底
 吹止て存帯成引摺り
 歌とまきあつらう法日傘
 翁成るる馬のあふまふ
 濱辺りくく成りあつらう法
 二日水空のうら下橋の春
 浪のまはれ折る年終るあのみ
 揺てくくく秋の水係
 すくくく雪の銀河男山

西村
 去々
 里々
 林車
 去々
 西村
 柳家
 山路
 海宇

唾し鳥羽子泣きそ人 林車

麻抄と垣よりけし縁こらも 舌こ

之月二日綿子舟出江 素大

胡瓦通つて流るるの風 柏家

几し子家くの書 綿子

升 三日月 半時庵

雨を掃りて

神くら

五月五日の節は古刹をゆく
甲子のおまじむくは徑より
上り下りもやまの海や
舟も奥より入るるは
船を遊ばはるるは
人乃工画のふり
時をわらふ節を
2時節のまみ

海舟 柳の 弁の 的

幸うがめしき... 独
多終をい右田の市上
あを君く國を城
乙所を台

りり晴ハ海のくぐり一島か

秋やん星

噴破身一しまるるさくさくのこ

二軍

馬廻り牛くは絶る秋星は又

宇和宮君舟一に遊てこも
や作りぬ

眼をぬぬぬ十里の道の

一日二日と宇和の好士とあはれ
のこつらりて又小舟は神を
くつてて吉田のまゐる

海に生れしよ青や秋の夜

宗昌梵字の夢ねいけなる

足利忠信乃持るあし

足氣のまうう冷まらふ世のいば

臨中一左の魂柳をぬす

死くると魂のぬんるるあ

毎思作よまひのわく定知な
越く

秋しれ持いこくし樹の空

松樹のくくをる山うはく

と名刺の一と年一とあし
て吉田のぬる石碎ゆり
やふふとまかき界は

風よりの春より流るる松のこ

蘇麟 竹と走る画

神々の心は 河を流る如く

水木山の心は 河を流る如く 蘇麟の心は 樹木山の心は 河を流る如く

揚乃皮切く庭乃さねる如

雄凡 鼓り入る 蘇麟

鳴る如く 竹や時のおちく 雄凡

燕や 音も 鳴る如く 蘇麟

我輩も 蘇麟の心は 河を流る如く 鳴る如く 竹や時のおちく 雄凡

夏吟

一ひれの心は 蘇麟の心は 河を流る如く

せめて 竹のおちく 蘇麟の心は 河を流る如く 蘇麟

うねる 揚乃をねる 蘇麟の心は 河を流る如く 蘇麟

揚乃をねる 蘇麟の心は 河を流る如く 蘇麟

山嶽 やり 蘇麟の心は 河を流る如く 蘇麟

富をねる 蘇麟の心は 河を流る如く 蘇麟

蘇麟の心は 河を流る如く 蘇麟

竹の心は 河を流る如く 蘇麟

蘇麟

東海川の宿、河をぬき対馬 夕川
是く喚く神也海山香部云 子嘉吉田 程足
水長し舟寸揺る日かき次 曰 定雄
少水乃眩りの如く也時多 曰 寸山

新脚歌吟

清い山越え松清乃螢々那 多田 燈心
首より樹々を漬の星能傘 曰 系柱
顔顔の雨より音なりねる風 氷之 千涯
互捺や心寂然らるる 子嘉吉田 不極

川もあやむはまきけり形もは 曰 桂波
空も楳乃眩る如く是れは云 曰 冠木
抱く草の秋意あり明乃輝 今

冬も水吟

物も水や南へくくもるの息 作嘉吉田 青谷
えりらよ肩わく山の如く 勢乃津 二中
吹はるは後水の接木乃時雨云 曰 古新

佐礼山へ詣る日

草も木も佛の心乃時雨の如 子嘉吉田 岑人

朝もれや佛の道の後やる小豆清 信朝

眠るるのち紅世ありりる牡丹与那志山 志山

暮るるの雪風射る心時あふ与那志山 千由

うもる心あしむるける生約日 程足

後ね地をくらふ新の光り日 定雄

もるる清一枯ゆ玉作品田 光崇

平くする席より四方けり与那志山 里々

師の句を徒く是て戯観が
らふ本の葉をいよふ山路の子あり
あふぬ父の縁いよふれて一白
をはく

風ゆや水よりなましく氷長壽

首書の家山ゆか親族杜家播り
持しけ伴とけるを師守りて念ふ

神とるはるりい長壽

王勅長壽

かきよまのう長壽

半明庵

ふべの代

うらまぬ

早苗長壽

一和長壽

長壽

女の女買り——日中——

う段南菊くらりてあふむる衣

阿風

小八重のふらうくちくは

蕙川

屋敷青のなほて時更まほ道好

布風

さうふ勢くあがり湯氣

汀橋

割縁乃勝く上りて鶴流ふ

至亭

誰の流を折糸とてん

車長

あふれくちて減りぬる雲の鳥

写巻

負折く折るその園取

阿風

連立そ花の流り月の橋

蕙川

扇の吟きこみと他ケる

布風

あつらんとつやけりて土ふ口

汀橋

申長くまに甲や少なる雲

外亭

とく人の顔乃出りしあ車

車長

振もやあけし村や啼く

阿風

振りよ事てなつてむる蛇の糸

蕙川

武士の好くさるふこり

阿風

神の湯と一度はあはむる

布風

四日

四日

ふ〜〜と神々しい月

撫子

四十五

全

郭をゆくやふ佛の南

作あつ田

受安

榮花城の葦川乃橋

写之

冠雉の砌へ春能来りて

枝取

手をよ抱く翠のさけ

抱琴

言信ハ風をくぐりて雲は月

花巻

懐も別よ来ハ川を来

柳角

河邊有る花虫は背を鏡り馬

昌園

笛撫もこの世を思

屯安

枕邊ふおきの伊系秋能秋

芬尺

今も古也道り空屋戸よ埃

都木

湖のらふは弾ももてよらねみ

管三

鳥の聲清く色散る花

柳馬

遠く樹もかく吼るかゝる念も

空安

一字なきはつりの月

枝紅

お娘乃字もあつて春は打詠め

葵里

四十六

花の枝とんへる斗一初志め	蝶乃流を弱ま	樟腦を吹や雛の羽をけ	只一奏やこもかや子	障なく振る	多水を知りよ多る胃鶴	頂乃此も伝説なるもの事	物言低く本城踏む事
羽狩	抱琴	紫格	文書	中書	柳角	花巻	柳角
							昌園

みごとく寝眠る指の凡の月	仲のかふさつり床の心	カキしふ流を伝はるの事	ふ師い五人を身しん	髪切乃洞むらさきりおのこ	少石の襖里を新し	病らり詠く振る大鼓	首振るく床り枝をさめ	道回くはまうねをいふ事
菅原	春原	羽神	文書	菅原	英里	枝紅	抱琴	と巻

去らばわら子と埋す海へ
其物のむい孫して孫孫
小すのり流る枝、枝
柳、洞

浮きくもる
舞、く、り

西宮

一時多路り海航乃波菜へ
俄く茂り十月の春
船中く船輪の浪家披きりし
能年ハ人の層よもあ
引観
富天
蕙江
千取

月よ粒違挑灯を闇にあ
躍乃如信よひく節の言
うり息とさあそ各一枯る
そよいあしく掃うぬ相
をりく二世の浪士の歌頼も
あふ乃中るへ入しあはは
玉指てあふ子一橋也りう喰
祿こゆくうハ庵よ春風
ゆりくとあふ明く礼生を
雲舟
昔園
素江
引徳
千取
雲舟
昔園
素江
引徳
千取
雲舟
昔園
素江
引徳
千取

西宮

道はくらくら 胃にお草
 妙のつと後身し 多々境
 仲人の虚を尾おし 詐
 大花や月を流るる 笑
 清夜もさの小舟はうし 音
 二 出園の帯の中乃 出さるる
 都くは信の保ふて 道
 負けてもさし 鶴を 振る 嘆は
 昔の鶴をさるる ぬ 振 袖
 千江
 引籠
 雲梯
 素江
 主園
 雲梯
 引籠
 千江

方士とも伝家なる 史にありし 江
 良の事も知り 奈る 七ノ
 白雲の雨は 似るもの 二十の 津
 破の扉へ 通ふか かなる 月
 釋くは 乱るる ぞん のい たり
 四ふふ 原よ 水鶴 流るる
 白雲の 雨は 似るもの 二十の 津
 指の 雨の 雨の おめ 髪 結
 終るる 終るる の 終るる 二十年
 全
 千江
 引籠
 素江
 雲梯
 引籠
 千江

奇よきわたり顔の石
 暁の鳥の鳴き高き若草の
 浜障りの風のそよぐ
 時季の移りゆく水鏡堂
 若草小舟の舟子

一折

新月や燈りの夜若の玉子敷
 花と遠出るおのり解き

徳川玉子

大甲ののほくさのさき
 うかきうけ継ぎへる
 夕陽の夕のまのたのむ
 月夜にさきかきつる事
 戴てみ草のまをたのむ
 河津泡のまをたのむ
 雨のちのちのちのち
 雨のちのちのちのち
 山はあまのちのちのち

潮歸く北よ玉河うららむ

世よ玉河一福の世なるらるる
玉河の世なるらるる

川の濁るに潮入る程う都

三水庵に花をうららけり

研めくまらん獲る中月の身

そまゝ舎文彦まゝ

松のまろかたて秋の家肥ん

素をまむ秋の肥るはまま
かたて家彦うららけり
風星月平やゆきく乾く一草
環くまろくまらねるまま

君らとめ環るに月のおうらら

夢神一はる

海よ小桂千むけり 奥の松を

海よの向いつとむけり 松山
海もまろくつとむけり 平松を

玉よと桂おむり 枝や胡楓

玉よのあふり 枝や胡楓
玉よは入い山頭の一庵を

花の葉の如き 子けり 秋の

とむけり 子けり 庵中の縁を
花の葉の如きを 子けり 秋の
花の葉の如きを 子けり 秋の
花の葉の如きを 子けり 秋の

舞あしやう 採くいさぬあま

夜録

戀清くして清く清く乃 樹くさ

竹子輝のよりくは強賢

夕輝のくまひしはえんく

杜高松標もてる別の方
やんといふは答へ

ゆき田のりくはまきく人のね
はるまきりるりの又この浦の
茶の暖くあり

ゆき田のりくはまきく人のね

秋まきくは田使田能道り

中徑より暖くはる

中まきくはるのりくはまきく人のね

吉備津宮

水の秋まきくは神代乃冬の日

庭園まきくは一ちかおむ

梅里やまきくは二日能神編

八幡まきくは

唐の麻射る神の本はるく

清湯まきくは川を流す

茶のまきくはるくはまきくは

茶のまきくはるくはまきくは

ふきくはるくはまきくは

草履はかきききて足痛くきい
歩路は叶はいて中へ申ふせし
こころはつら川に身をたてて
もろくもろくもろくもろくもろく
さき

ゆつと向ん入る白くも自由の上

ゆつと向ん入る白くも自由の上
こころはつら川に身をたてて
もろくもろくもろくもろくもろく
さき

唐琴の調をくわゆる新編のふ

虫の鳴き声

楫拾ふ音やゆきのさきりて

ゆつと向ん入る白くも自由の上
こころはつら川に身をたてて
もろくもろくもろくもろくもろく
さき

雲のいま朝の明るの月毛の柳

ゆつと向ん入る白くも自由の上
こころはつら川に身をたてて
もろくもろくもろくもろくもろく
さき

墓披はさきりてあはれおとあは

ゆつと向ん入る白くも自由の上
こころはつら川に身をたてて
もろくもろくもろくもろくもろく
さき

先河をせしむる日いさぬの日女怨の風

さき

ゆつと向ん入る白くも自由の上

自他のおききききて足痛くきい
歩路は叶はいて中へ申ふせし
こころはつら川に身をたてて
もろくもろくもろくもろくもろく
さき

徳邦好士別道別句、九記

四四六

家朝も輝く雪のり 浪伝き雪 小豆傳 米流

水くは清き水いすか 白雲うか 小豆傳 松木

やてやうの鶴もや 暮れぬ風 日 海鳥

雲一を張てり ありかた 日 分仙

風急なる風も 花の月 日 吐玉

吹つり 穂一 あり 日 赤雷

風子 枝の標や 互 柳 日 可笑

きて引ち あり あり 日 梅天

高も 旅より 入 けり 日 洞水

引 多ん 世より 花乃 枝 百合 日 経紅

花の 咲く あり 日 浪泉

角 あり 日 砂流

笛 あり 日 鬼角

高も あり 日 雲子

櫛の あり 日 白掌

以下 あり 日 下向

花 あり 日 方之

四四七

神蟬と服と河く浦は草の庭 日 安く
 音ははかく猿の衣や梅の匂 日 眠湖
 梅のさ実ほちる香い玉の白い子 日 一羽衣
 海に知し星いあ宙の音ほりり 日 宿流
 名いゆらうよらるほやせおの風さる 日 彦友
 夢よりある内乃揚くく屋うぬ 日 白蝶
 道の香や吹流し花のやめ 日 彦凡
病所病とのまふまふ 日 従懸
 病十んいぬせあんその花や月雨 日
 梅さるくむまら花いこく 日 文所
全品

層より不徒やしらそ藻刈舟 日 砥石
 神唐く吹や夏あそく志帆行帆 日 泰山
 竹の根をほくそて清ん五月 日 壬子
 故子別て来そそ世界の教々そと 日 巴陵
嘉川 日 山
 云の葉の河あそ新し扇は平 日
 カはくそ子の千里ややうは山平 日 一炊
 菊の水を吸や都乃友あそと 日 南浦
 踏の草てそふあつるよはきりり 日 文翁
 のうらむや徳枝の雪ま玉の氷餅 日 一子

平水浮遊枝葉子涼むあうね 日 栢見
 向くふれぬい難勝乃すまふか 日 自樂
 ねいさくくは夕立り難勝人 日 養虫
 さすくく草や難勝法風意法 日 虫門
 野村や知て暮れくま涼遊 日 虫吐
 清き法風法割るうららいふ 日 師友
 干今如おや拵て杜らう 日 澤雄
 笑のう接く涼あうまうりな月 日 寸梁
 嘘り泣く我を涼かや甘友の州 日 音補

ま田舎別後ふと巻のの雪 日 後人
 ふもよ乃いて涼あやめ鈍の家 日 武雄
 空の風画くとも涼あまら甘友の家 日 止流
 音あうねあまえくは涼く那 日 末白
 二名あな解ぬおとるな月 日 万壽
 涼引涼をさるりの日あふれ 日 後沖
 涼凡を交てさうや小毎原 日 徳沖
 海まきお布おし何の涼との海 日 巴水
 月涼い時遊んるの草 日 後趾

浪の音袖て涼し 龍波の香 日 龍隆

疾風の音もあつらふ 暮れ月 日 村雄

何事は心し 龍波の音もあつらふ 日 南流

時ふきわたり 龍波の音もあつらふ 日 唯石

神もも実もあつらふ 日 辰山

源向の音もあつらふ 日 其流

水母の音もあつらふ 日 捨捨

あつらふの音もあつらふ 日 豊石

あつらふの音もあつらふ 日 豊石

おのの音もあつらふの音もあつらふ

あつらふの音もあつらふ 日 更互

あつらふの音もあつらふ 日 道

あつらふの音もあつらふ 日 初

あつらふの音もあつらふ 日 志山

あつらふの音もあつらふ 日 倉牙

あつらふの音もあつらふ 日 龜白

あつらふの音もあつらふ 日 桑人

あつらふの音もあつらふ 日 千丈

あつらふの音もあつらふ 日 枕涼

世

鳩鳴やふれまゝなす風はる日
 瑞々や一雨の吹く福乃花日
 翠の尾と紅の玉あ麻の香日
早もろく早もろく早もろく月の日
 おあめや懐く銀乃摺あ紙日
 花もろくもろくもろく乃乃花日
 ちんちんかろくもろくもろくもろく日
 りめもろくもろくもろく乃乃花日
土佐の具と知ろうと
 回響一の具もろくもろくもろく日

夫人
 斑江
 里玉
 美六
 愚所
 抗江
 枕流
 仙舟
 百部

春もろくもろくもろくもろく日
 笑もろくもろくもろくもろく日
奥いよこまもろくもろく
 春の一もろくもろくもろくもろく日
 正もろくもろくもろくもろく日
 春もろくもろくもろくもろく日
 追風の娘もろくもろくもろく日
 旭もろくもろくもろくもろく日
 春もろくもろくもろくもろく日
 物一の好もろくもろくもろくもろく日

鶴人
 天曲
 一松
 湖舟
 仙言
 如木
 何木
 昌糸
 凡津

正

吟虫もゆりまゝもよけ下地を
日 ちり

音を響く此の音ははらばら
日 柳北

只る夏の夕に朝やあけの音
日 大羽

漸くも清く静かに暮の光
日 夕舟

朝来送客帰 自是信音稀
日 子卿

携手折揚柳 如何為鳳飛
日 子卿

暮の縁にうらふ花はひら
日 満志

東の香のやぶふかき花の
日 環女

花のほまほく清いあけの
日 千朝

海にそよ風も極男出りり
日 十吃

道なきを世とてふすや極
日 隣苑

補くの名の清き流や極
日 杜喬

河原やい道なきもあけの
日 杜喬

流をゆく清の白くもあけの
日 雅鶴

遠くも響く河も月の照
日 橋隣

清き極も推ふ河も月の照
日 車机

雪少もや河は流のまゆみち
日 沼丸

清くも流のちりもあけの
日 山雲

⑤ 山雲

花の香は相の落葉かかす夜
日
望の満ちてみら画くは院の
日
琴五
断長

行脚山川海陸の吟
情の記載して年々
とふも所う諸好士集情
乃句といふと母憂心の
又風を香月の常あらん

六々韻

湖とふの歌と家生は杜宇
只清
子に綿くさる竹の如路
富乞
陰影の有りけり乃空に
香吹
わやくく織と新いあき
冠山
みちくく旭の香く月の舟
蝶分
相葉の浮流は心人
帆舟
萩の香は髪は舟の神
冠山
まじりか子にたしきぬい
只清
咬はく九条とら紙の抱帯
香吹

③五十一

亭より見れば昔もこの山

蝶衣

舞袖も花の心もくらくと曇

品尾

月の傘も増すも

冠山

うしろと晴が空あり水車

蝶衣

物の初顔甲ういふ月

杏吹

扇へ入舞うとさうも花をた

品尾

隣へまをた世に紫の家

蝶衣

白川もあてまをた思ひの心

冠山

屏風襖よりみえ乃画是

杏吹

=

道の糸線はふうきね東好紫

蝶衣

と舟にあてて礼者ある宮

品尾

傾城、傾城堂のしをたてて

杏吹

とねね親しん様子望むを

冠山

涼と花がさくさくさう

蝶衣

世界のあけの城も大雪

杏吹

茶も合はぬは益田ありか

冠山

微かといふかさのゆけり

品尾

多分かくとほの玉の大欠

杏吹

こゝろのむの河らにわく
 後らまよまれく益い年如月
 守てらぶる一麻打と名
 相取へまよ嫁入候勢と系つ
 水鼓と考る師を考る
 柴州の不服と通る不初考
 我ちらへる角十里あり
 之月や三つの一社の元成
 守すく名の部合う候室
 輝分
 品信
 冠正
 輝分
 品信
 冠正
 喜次
 富元
 今

六月十日

江戸

多き月や山の月秋の法
 朝りるに夕とまゝ人
 うまに婦はくり富中
 只まらふ其の社まか
 連り 乾押るふ清と水
 輝くまら海湖新し
 半く月潮りのまら名

てを嘆き以て悲しき後
びて清光の由り去る
去りては我を好む
其れいふをきくは
船きくは後めては
しききくは二女
時々揺るは糸
い雲のありは
捨つて又かぐ
捨つて又かぐ

解るるふじふ武原の山
掃くは中を愛するは
らん雲のありは
むけ具なるは
元少のありは
お歡笑後来

風名

只清

①

春宴

春をねや五月のゆい味を守

早秋

ねをくは木の向く友

富天

杜宇神香の跡を懐くらん

儿山

壁は屏風より画をえはく

分川

研くくは大方の道具よるの月

琴行

つめく色は花をみ葉を枝

雨荷

腐^ラつてはけりとい秋乃ち花枝

牛湖

まうまう舟小燈をほろを

柳下

南をらんかひをくくは面ふさ

春日

化身をかへてつれをえ

春夜

ふ知れどもは引合へ云はる

春川

離宮をなほふ一本乃春

泉牙

あつては花をさる丹の侍ら道

花子

秋涼くも花のさけ所

早秋

射く秋のさくふをてつれを

泉牙

松の月をらん下く板

儿山

春をねの東寸部の花のま

雨荷

二
 いづき之月乾く糸の脊
 堂の縁わくくさねのち
 石州のくくくくく
 千ノ木何を枝の元あさ
 蜂の小門を仕切り素新
 鶴の控てくくくくく
 くくくくくくくくく
 世夢は言はせ梅の
 中々くくくくくくく

脊
 松
 麻
 分川
 東門
 松
 昔口
 昔口
 昔口
 昔口

くくくくの教初きん
 月よまあめく
 孤くくくくく
 松舟の五の踏
 生土の茶室
 何そくくくく
 初雪小大脇
 花子合かまの流

東門
 松
 昔口
 昔口
 昔口
 昔口
 昔口
 昔口
 昔口

遠く海流に流るる人撰る 馬河

舟中吟

木崎庵

六十九歳七月乃

多目録

良歌

早稲作 進人 今

高き 三子の歌

サレ

